

スペイン領フィリピンにおける「中国人」 ——“Sangley,” “Mestizo” および “Indio” のあいだ——*

菅 谷 成 子**

The “Chinese” in the Spanish Philippines: The “Sangleys,” the “Mestizos,” and the “Indios” in Historical Context and Perspective *

SUGAYA Nariko **

About forty years ago, Edgar Wickberg, in his pioneering and seminal work on the nineteenth-century Philippines, established how the Chinese had emerged as a commercially powerful foreign group in a Spanish colonial setting, while the Chinese mestizos had risen as a “special kind of Filipino” to support Philippine national awakening toward the turn of the century. Recently, scholars such as Richard T. Chu have questioned the identity of the Chinese mestizo as a “special kind of Filipino.” Chu argues that Chinese mestizos at the turn of the century had multiple, fluid, and ambiguous identities and cannot be said to have had a simple Filipino identity. He concludes that the Filipino identity as a nation was only established definitely after 1910.

This paper identifies some of the particular historical factors that brought about the social rise of the Chinese mestizo as an uniquely Spanish colonial being distinct from the “chhut-si-á” or “tsut-sia” of later years. This paper also shows that the “Chinese mestizos” Wickberg had in mind were not the same “Chinese mestizos” that Chu deals in his recent works, and suggests that the study of overseas Chinese or Chinese overseas can be relevant to Southeast Asian Studies only when it is placed in a historical context and perspective.

Keywords: Spanish Philippines, Spanish colonial administration, Chinese, Chinese mestizos, Overseas Chinese, identities

キーワード: スペイン領フィリピン, スペイン植民地行政, 中国人, 中国系メスティーソ, 華僑・華人, アイデンティティ

* 本稿は、2005年9月5-7日に開催された京都大学東南アジア研究所東南アジアセミナー「東南アジアを超えて——華僑・華人研究のフロンティア」における報告「“Sangley,” “Mestizo” および “Indio” のあいだ——スペイン領フィリピンにおける “Chinese” を考える」をもとに、それを加筆・修正したものである。

** 愛媛大学法文学部; Faculty of Law and Letters, Ehime University, 3 Bunkyo-cho, Matsuyama, 790-8577 Japan
e-mail: sugaya@ll.ehime-u.ac.jp

はじめに

フィリピンでは総人口の約1-1.5パーセントが「華僑・華人」とされ、東南アジア諸国のなかで、総人口に占める割合においても人口規模においても、「華僑・華人」の存在は必ずしも大きいとはいえない。しかしながら、フィリピン経済、なかでも商業・流通において「華僑・華人」系企業の占める割合は決して小さいとはいえない。たとえば、1990年における卸売・小売業界上位1,000社（非外資系）の総売上高のうち、74パーセントを「華僑・華人」の所有にかかる企業が生み出していた [Dannhaeuser 2004: 237]。さらに、フィリピンにおける「華僑・華人」を特徴づけるのは、その約8割が福建省南部沿海地方—閩南、廈門の後背地をなす旧泉州府や漳州府地域の出身であることで、その多くは、19世紀中・末葉以降、すなわち、スペイン領フィリピン末期、なかでもアメリカ統治期以降にフィリピンに來住した中国人あるいはその子孫である [Wong 1999: 14-20]。現代フィリピンを代表する企業の創業者あるいは経営者も例外ではない。

これらのフィリピンの「華僑・華人」は、一般に、自分たちの世界に属する者を「咱人（ランラン lán lāng）」とする一方、一般のフィリピン人については「番仔／蕃仔（ファンナ hoan-á）」と言及し、明確な境界意識をもっているという [宮原1998a: 30-33; 1998b: 209-210]。他方、一般のフィリピン人は、これらの「華僑・華人」を侮蔑の語感をともなって「インチック（Intsik）」と呼ぶ。このような両者を互いに「他者」として排除するような意識、2項対立の構図は、いつから存在するのであろうか。¹⁾

そのなかで、近年「華僑・華人」の一部には、「中国人性（Chinese-ness）」を積極的に保持しつつ、自身の政治的なアイデンティティ、忠誠が明確にフィリピン国家にあることを表明する一方、エスニックグループとして、フィリピン国民の正統な構成要素として認知を求める動きがある。²⁾ フィリピンの「華僑・華人」は、アメリカ統治の下で、本国の排華法——中国人労働者（華工）の流入を禁止——の適用を受け、さらに血統主義にもとづく帰化法の施行——

1) フィリピンにおける反華人感情を反映しているとされる近年の現象に、1991年以降の中国系フィリピン人を主な対象とした営利誘拐事件の多発があり、命を落とす犠牲者も少なくない。これに対する「華人社会」の反応については、Carino [1998: 82-88] を参照のこと。また、1998年の大統領選挙に際しては、アルフレッド・リム候補に対して、その出自をめぐる政治的な攻撃があった。これについて、ナショナル・アイデンティの視角からの分析は、Bankoff and Weekley [2002: 135-139] を参照のこと。

2) 1987年8月28日に設立された非政府組織、菲律濱華裔青年聯合会（Kaisa Para Sa Kaunlaran, Inc.; カイサと表記する）が運動の中心をなしている。この前身は、1950-60年代のフィリピンにおけるナショナリズムの高揚を背景に、1970年に設立された合一協進会（Pagkakaisa Sa Pag-unlad, Inc./Unity for Progress）で、これは「菲華融合」を目指すものであった [McCarthy 1974: ↗

1939年の改正帰化法は出生地主義を廃止——などもあって植民地社会の「他者」として存在し、さらに、フィリピン独立後のナショナリズムの高揚を背景にフィリピン国家・国民形成から排除されてきた [Wong 1999: 5-8, 28-29; Alejandrino 2003; 宮原 2001: 270-272]。そこで、彼らは、啓蒙、文筆・出版活動などを通して、一般のフィリピン人を含めた意識改革を推進し、フィリピン国家史・国民史（ナショナル・ヒストリー）のなかに「華僑・華人」を「適切に」位置づけることを求めている。ここでは、彼らが一貫して、フィリピン国家の文化的多様性に貢献してきたこと、他のフィリピン国民と共通の歴史経験をしてきたこと、特に1896年に始まるフィリピン革命運動において貢献したことなどが強調される [Bankoff and Weekley 2002: 46-53; 宮原 2002: 477]。

フィリピンと「華僑・華人」の出身地との密接な結びつきは、1571年にスペイン領フィリピンの首都として「マニラ市」が設置され、さらにヌエバ・エスパーニャ副王領（メキシコ）のアカプルコとの間のガレオン船による定期航路（マニラ・ガレオン貿易）の確立で新大陸の銀が流入したことに始まった。それ以来、今日に至るまでマニラには、時代を超えて、一貫して「中国人移民社会」が存在してきたのである。そのなかで、特筆されるのは、フィリピン史における転機——現代のフィリピン社会を特徴づける基本的な社会経済構造の枠組みの形成が緒についた——とされる時期、なかでも1750-1820年の間に、「中国系メスティーソ」が商業的な勃興の契機をえて、それ以降の植民地の社会経済構造の変容を促進させる主要な担い手となるべく、一つの社会集団として植民地社会に姿をあらわしたことである。³⁾これらの「中国系メスティーソ」は、19世紀中葉から末葉にかけてのフィリピン革命期に繋がる民族意識の高揚期において、「フィリピン人」の生成およびフィリピン国民国家の形成に指導的役割を果たした。

「中国系メスティーソ」とは、スペインによるフィリピン植民地の住民分類の一つで、中国人 (sangleys⁴⁾) または中国人との混血者 (メスティーソ) を父親にもつ個人を指す。スペイン

Appendix]。これを発展的に解消したのがカイサで、菲華歴史博物館 (Bahay Tsinoy) および施振民記念図書館 (Chinben See Memorial Library) などを擁する「華裔文化伝統中心 (Kaisa-Angelo King Heritage Center)」を設置している。カイサの政治的なスタンスなどについては、宮原 [1997] を参照のこと。カイサは、また、中国系住民を狙った営利誘拐や金品の強奪事件の多発に対しても、フィリピン政府が汚職を排して正義を実現するように強く求め、世論にも訴えるべく政治行動を行っている [Carino 1998: 82-88]。カイサ設立の経緯およびその活動の全容については、Ang See [2004] を参照のこと。

3) この時期は、東南アジアにおける「中国人の世紀 Chinese Century」とされる時期と重なっている。「中国人の世紀」については、Reid [1997: 11-14] を参照のこと。

4) “sangleys” は、スペイン領フィリピン諸島に来往する中国人を指し、その態様を反映した「常来」 [Boxer 1950: 43]、あるいは漢語の「生意」に当たる閩南語の「生理」に由来すると考えられている [陳 1963: 30]。19世紀に入り、“sangleys” は次第に “chino” に取って代わられるが、16世紀より18世紀に至るまで主に使用されていた。なお、18世紀中葉に刊行され、19世紀に再刊されたタガログ・スペイン語辞書は、“sanglay” を見出しとして採用し、“sangleys” を指すとしている。また ↗

語文書では、通常、“mestizo de sangley (メスティーソ・デ・サンレイ)”と記された。⁵⁾ 中国系メスティーソは、今日、いわゆる「フィリピン」的と目される洗練された都会的生活や行動様式の担い手でもあった。現代フィリピンの有力家系の多くは、スペイン領フィリピン社会のエリート層——19世紀末葉までに経済力に裏うちされたスペイン的教養をもって社会的上昇を遂げた——に遡るとされるが、その中核をなすのが「中国系メスティーソ」であった [Anderson [1988]1995]

本稿では、現代のフィリピン社会における「華僑・華人」と「フィリピン人」を分け隔てるものの存在を念頭に、スペイン領フィリピンにおける「中国系メスティーソ」が、なぜ「フィリピン人」となりえたのかを基軸に据え、当時の「中国系メスティーソ」生成の歴史的条件を検討する。具体的には、「中国系メスティーソ」を生み出したスペインの植民地統治、その下での中国人移民社会のあり方、その当時の植民地を取り巻く南シナ交易圏、および植民地社会と交錯するところに「中国系メスティーソ」の存在があると考え。その際、「中国系メスティーソ」あるいは「中国人移民社会」に関わる若干の研究を参照しながら、スペイン領フィリピンの「中国人」がアメリカ統治時代を経て、現代フィリピン国家、その下に居住する「フィリピン人」や「華僑・華人」とどのように繋がっているのかを展望する。それによって、東南アジア史と「華僑・華人」研究が接合する契機を探り、今後の課題を考える手がかりを提供したい。また、マレー半島におけるババやジャワにおけるプラナカンなどとの比較考察の視点も提供できればと考えている。

「中国人」と「華僑・華人」

本稿では、スペイン領フィリピンへの中国からの海外移住者について、基本的に「中国人」あるいは「中国人移民」と言及し、その混血の子孫については、「中国系メスティーソ」と記述する。これは、中国国家への帰属意識が明確でなかった時代の移民を、19世紀中葉以降、東アジアの国際秩序が従来の華夷秩序から条約体制下の国家群に移行するなかで、清朝（ある

→ 「インチック」は、“insic”と綴られ、“chino”のこととある [Noceda and Sanlucar 1860]

5) 「中国系メスティーソ」は、単に“mestizo”とも表記された。父系による分類であるため、ある個人の母親が「中国系メスティーソ」であっても、父親が「スペイン人」「スペイン系メスティーソ」「インディオ（[カトリック化した]原住民）」であれば、その個人は「中国系メスティーソ」とはされなかった。また、申請によって「中国系メスティーソ」から「インディオ」に変わることも、あるいはその逆も可能であった。すなわち、「中国系メスティーソ」は単なる「人種」分類ではなく、「中国系メスティーソ」に留まることは「社会的」意味をもっていた [Wickberg 1965: 33-34]。ここでいう「中国系メスティーソ」は、スペイン領フィリピンにおける固有の歴史的存在を指し、現代の「華僑・華人」社会で、「番仔」との婚姻で生ずる「出世仔（ツシア chhut-si-á/tsut-sia）」とは別である。「出世仔」は「咱人」の下位区分で、ある個人の「華僑・華人」社会での一代上の世代との関係を示す一時的なカテゴリーである [宮原 1998a: 31-33]

いは、その後の中華民国および中華人民共和国)に帰属し、それへの忠誠という含意をもって、新たに使用されるようになった「華僑」という用語で表すことを避けたいからである。また、「華人」についても「華僑」に対照するものとして、戦後の居住国におけるナショナリズムの高揚を背景にして、一般にその国籍との関連で使用されることになっている〔可児 1995: 6-11, 20-24〕。また、近年「華人」は「エスニック・チャイニーズ」という意味で使用されるが、現代のトランスナショナルであれ、ディアスポラであれ、「中華」発祥の地、その具体的な中心として、中国国家（清朝、中華民国、中華人民共和国）が意識されざるをえず、また、個々の「華人」が「中華」を意識し実践する具体的な場として居住地の国家との関係があり、「国民国家」の文脈を抜きにして語ることは難しい〔宮原 2001: 268-272; 2002: 476-479〕。

さらに、「華僑」の概念は、苦力（華工）の大量出現や条約体制への移行など、19世紀中葉以降の清朝を取り巻いた政治・経済状況を背景に、清朝あるいは革命勢力が海外中国人の中国国家への帰属を求め、「華僑」として積極的に把握・利用することと結びついて生成され、その後の歴史のなかで新たな意味を獲得しつつ発展したものである。現代の「華僑・華人」社会は、一般に「中華民国」「中華人民共和国」の存在をよりどころに、これまで「華僑・華人」であり続け、居住した植民地国家あるいは国民国家における政策とも相まって、その地の「他者（the Other）」として生きてきた人びとにより形成され、維持されてきたものである。⁶⁾そのため、「華僑」成立以前の中国人移民とその社会を捉える際には、「華僑・華人」という用語がそれらの人びとの自己認識を投影することに注意しなければ、非歴史的な意識に掬めとられる危険を冒すことになる。

フィリピン近代史における中国系メスティーソ——「特別なフィリピン人」

フィリピン近代史における「中国系メスティーソ」の重要性、すなわち「中国系メスティーソ」の存在を無視してフィリピン近代を語りえないことを、約40年前に、初めて学問的に指摘したのは、エドガー・ウィックパークであった〔Wickberg 1964〕。ウィックパークは、さらに19世紀後半に焦点をあてた『フィリピンに生きる中国人』を著わしたが、これは、フィリピン国立文書館所蔵のスペイン語史料を活用した初めての本格的なフィリピン社会経済史の

6) 中国の改革開放政策の下での新たな移民の創出、あるいはトランスナショナルな移民との関係から、従来の「華僑・華人」社会と、これらの人口移動現象をどう区別し、あるいは関連づけ、捉えるのかを検討する必要がある。宮原は「再移民の登場により『フィリピンのチャイニーズ』という呼称法がもはや不能となった」と述べている〔2002: 490, 注1〕。王廣武は、19世紀以降の中国人移民についての4つの時期区分を示している。現代は、「アメリカ・オーストラリアへの再移民」の段階を経て「地球規模での移民」の段階にあり、知識や技能を有する人びとによる「僑居（Sojourning）」が（再び）属性となっている〔Wang 1996: 8-14〕。

業績といえる [Wickberg [1965]2000]。ウィックパークによれば、中国系メスティーソは、スペインの統治政策により、そのアイデンティティのよりどころを、カトリシズムとそれを基底にしたスペイン的教養や生活様式におき、上層のインディオと文化的志向を共有しながら、植民地社会における一つの社会集団として析出した。ウィックパークは、「中国系メスティーソ」が総体として「中国人」と対抗しながら18世紀中葉以降のフィリピン植民地社会の変容を推進する機能を果たしたこと、および彼らが19世紀中葉以降の民族意識の高まりのなかで「フィリピン人」となっていた点に注目して、彼らが「特別な中国人 (a special kind of Chinese)」ではなく「特別なフィリピン人 (a special kind of Filipino)」であったとした。⁷⁾ その点において、中国系メスティーソは、「特別な中国人」であったジャワのブラナカンなどと対比して、フィリピン史に固有の存在であった [Wickberg 1965: 31, 239–241]。⁸⁾

ウィックパークは、フィリピン史の分野において本格的な社会経済史研究の端緒を開いたといつて過言ではない。この後、スペイン領フィリピンについて、国立文書館を初めとする未刊行史料を駆使し、世界システム論の視点などを取り入れた優れた地方史あるいは社会経済史の業績が出版されたが、その多くは、ウィックパークの示した社会変容の枠組みを検証する側面をもっていた。それらは、植民地の社会変容における主要な担い手として、中国人および中国系メスティーソに注目し、その存在を各地方あるいは各地域の歴史に具体的に位置づけている。

1982年に、アルフレッド・マッコイおよびエディルベルト・デ・ヘスス編『フィリピン社会史』が気鋭の研究者による最新の成果エッセンスを集大成して出版され、ジョン・ラーキン は、同じ年、新しい時代区分を提案した。⁹⁾ ベネディクト・アンダーソンは、現代フィリピンの政治エリートの系譜を、ウィックパークを出発点に、中国系メスティーソなどのスペイン植民地社会のエリートが、アメリカの植民地統治方針により、中央から地方レベルまで権力を独占するようになったことに求めている [Anderson 1988]。

7) ウィックパークの業績以降、中国系メスティーソを主題とした論文には、Merino [1969] や Tan [[1984]1988; 1994] などがある。前者は、ドミニコ会の洗礼簿などの文書記録を利用して、中国系メスティーソの具体的事例を挙げている。後者は、ウィックパーク以降の研究成果を参照しつつ、フィリピン革命に繋がる民族主義的な運動と関った中国系メスティーソを中心に述べている。また、日本語の業績としては、池端 [1992] がある。

8) スキナーは、東南アジアのクレオール化した中国人社会として、マレー半島のババ、ジャワのブラナカン、フィリピンの中国系メスティーソを取りあげ、それぞれの固有の歴史的な文脈を踏まえて、その生成の過程を比較検討して、共通点や相違点を示し、それぞれの特徴を明らかにしている [Skinner 1996]。なお、インドネシアの政商 (チュコン) の系譜を、オランダの植民地統治政策の変更を背景に、中国系社会の主導権がブラナカンから新客 (トトック) へと遷移したという歴史的な文脈に位置づけて論じた日本語文献として、白石 [1987] がある。

9) ラーキンは、それまでの外来勢力との関係を重視し、マニラ中心主義にかたむいた時期区分 (スペイン植民地化以前; スペイン植民地化と前期植民地時代, 1565–1762年; イギリスのマニラ占領と後期植民地時代, 1762–1896年; フィリピン革命期, 1872–1901年; アメリカ植民地期, 1901–46) へ

ウィックパークの業績が「華僑・華人」研究との関係で特筆されるのは、「中国人」を扱っていないながら狭い「華僑史」を脱して植民地社会の構造を分析したことであろう [Wickberg 2000: vii]。ウィックパークは、「中国人移民」をフィリピン固有の歴史的文脈に位置づけることで「中国系メスティーソ」の存在を再「発見」し、フィリピン史における「中国人移民」の意味を明らかにした。従来の「華僑史」においては、「抑圧的」で「腐敗した」スペインの中国人統治——16世紀末葉から18世紀中葉までの間に生じた数次にわたる中国人「蜂起・虐殺」事件を初めとして、居住や移動の制限および重税を課し、賄賂を要求するなどした——との関係に問題関心を集中させることが多かった。そのため、「華僑」を被害者として捉えがちで、それらの現象を、スペイン領フィリピンを取り巻く国際情勢やスペイン領フィリピンの歴史に位置づけて相対化する視点に乏しかった。¹⁰⁾ このような「華僑史」の立場は、当時のフィリピンにおける「華僑・華人」問題が、16世紀以来のスペインの抑圧的な統治政策により、中国人とインディオが分断され続けた結果であるとする一方、その淵源が、そのような抑圧にもかかわらず、一貫してインディオあるいは「フィリピン人」を圧迫し搾取しながら、経済的成功を収めてきた中国人の存在にあるとし、それに帰するような本質主義的な言説とも通底し、また、そのような本質主義的な言説を導くものでもあった。¹¹⁾

ウィックパークは、当時のナショナリズムの高揚期の下での、そのような非歴史的な言説を排して「フィリピン人」と「華僑・華人」の2項対立の淵源がスペイン植民地末期、1850年からの約半世紀にあると指摘した。すなわち、1) スペイン植民地政府が中国人移民の奨励に転じた結果、それまで地方の商業活動を握っていた「中国系メスティーソ」の利益を損なうかたちで、中国人移民が商人として植民地に遍在して商品流通網を掌握した。2) 中国系メスティーソは、商品農業の展開のなかで、商業活動から撤退して土地保有に集中し、商品作物生産に特化した。その一方、一般に中国人商人に商品流通の上で債務を負う構造ができあがった。

↘ 年；日本占領期，1942-1945年；フィリピン独立以降，1946年～）に代って，社会経済史の観点からの時期区分を提唱した。それによれば，スペイン領フィリピン成立を始点として，1565-1745年，1745-1820年，1820-1920年，および1920年から現代までとなる。

10) たとえば，李永錫 [[1959]1979]，呉景宏 [1968] などがある。その他に陳荊和 [1963]，その英語版として，Chen [1968] などもある。なお1639年の中国人「蜂起・虐殺」事件について，日本語の専論として，内田 [1974] がある。その他の「華僑史」としては，中国人がフィリピンの社会や文化の豊かな発展にいかに関与してきたのかを論じるタイプのもので，やはり，フィリピン史の立場から位置づける視点は乏しい。

11) たとえば，陳台民 [1985]。またGuerrero [1966] は，当時のナショナリズムを背景にしたフィリピン知識人の反華的な態度を反映し，本質主義的に記述した歴史論文（概説）の典型であろう。これは，アルフォンソ・フェリックス編『フィリピンにおける中国人』（全2巻）所載の一論文であるが，この論文集自体は，当時の反共産主義と反華ナショナリズムを背景に，「華僑・華人」をフィリピン国家に適切に位置づけていくために，「華僑・華人」に対する理解の増進を目的に刊行された。フェリックスは，第1巻の巻頭論文で，フィリピン国民国家における「華僑・華人」問題の解決のあり方として「同化」を提唱している [Felix 1966]。

3) 1880年代以降のスペイン植民地政府をも巻き込んだ反華人運動の背景に、中国系メスティーソおよびインディオに共通する利害があった。4) 中国人移民社会の指導者は、自らの利益を擁護するため、「中国人移民社会」を強固に組織するとともに、領事館設置の運動にみられるように清朝との公的関係の樹立を求め、植民地社会に異質の「華僑社会」が出現した。この2項対立の構造がアメリカ統治政策の下で強化され、独立後のフィリピンの各種反華政策に繋がった。すなわち、1850-98年は、アメリカ統治期——中国国家と密接に結びついた中華総商会体制に特徴づけられる「華僑社会」とフィリピン社会との対立の関係が固定化した——を準備したのである [Wickberg 1965: 67-80, 237-244; 1997: 161-163]

「中国系メスティーソ」再考

フィリピンに生まれ育った新しい世代の「華人」であるリチャード・チュー¹²⁾は、近年、「中国系メスティーソ」について、ウィックパークの「特別なフィリピン人」に異議を唱えている。チューによれば、19世紀末葉から20世紀初頭の（特に初代の）中国系メスティーソは、「中国人 (Chinese)」でもあり、そのため、個々人のアイデンティティのありかたは重層的で、均質な「中国系メスティーソ」集団が存在していたわけではなく、その意味で「国家」による分類に一致するものではなかった。¹³⁾ すなわち、チューは、ウィックパークの主張する「中国系メスティーソ」は歴史的に「中国人」とは袂を分かって、一つの社会集団として別のアイデンティティを確立していったため、1898年の時点をもって、彼らのアイデンティティが一括して「フィリピン人」へと不可逆的に移行したとする見方に修正を迫った。¹⁴⁾

チューは、19世紀末葉に、植民地国家による民族分類「中国系メスティーソ」が廃止された後も、個々人のレベルにおいては直ちに「中国系メスティーソ」のアイデンティティが消滅

12) チューは、1965年生まれ。南カリフォルニア大学より博士号を取得している。現在マサチューセッツ大学アマースト校歴史学科で教鞭をとっている。脱稿後、博士学位論文 [Chu 2003] を手にしたが、本稿で示した論点と基本的に異なるところはない。

13) ウィックパークは、必ずしも中国系メスティーソが個々に多様なアイデンティティを保持していた可能性を否定してはいない [cf. 1965: 137, 145]。なお、限定をつけずに、個人のレベルでのアイデンティティのあり方の重層性や可変性を強調し過ぎると、逆に非歴史的な議論に陥る可能性がある。

14) ウィックパークは、明示的ではなかったが、スペインによる住民分類の下で、おおむね19世紀中葉頃までに集団として析出した「中国系メスティーソ」が、総体として、いかなるアイデンティティを選択したのかを明らかにしたと思われる。この点を踏まえて、ウィックパークは、最近、フィリピンにおける中国人の歴史について、そのアイデンティティのあり方という視点から、1) 1570-1750年、1750-1850年、1850-1900年、1900-30年、1930-75年、1975年以降、あるいは、移民社会の発展という観点から、2) 1570-1750年、1750-1850年、1850-1930年、1930年以降、という二つの時代区分を提唱している [1997; 2000: ix-x]。いずれにせよ、チューが分析の対象としている「中国系メスティーソ」は、主として、19世紀中葉以降の中国人移民を父とする初代であり、ウ

したとはいえ、さらに現代のフィリピン国民に繋がる「フィリピン人」の成立には、特に他者／外部者（Others / aliens）としての「中国人」の定義の確立——1909年の清朝の国籍法および1912年の中華民国の成立が密接に関わっており、それゆえ、これら二つの境界線が明確化するのとは早くとも1910年頃以降であると指摘した。たとえば、1912年以前のフィリピンには、在住中国人を取りまとめる社会組織としては中華総商会¹⁵⁾しかなく、華文学校はマニラに1校（中西学校）のみで、1年を越えて刊行された華字紙も存在しなかった [Chu 2002b: 354, 365, n. 73]。この間、かつての「中国系メスティーソ」は、個々に重層的なアイデンティティを維持しつつ、その場の状況に応じて、自らにとって適切なアイデンティティを選びとって行動していた。そのため、彼らは最終的に必ずしも一括して「フィリピン人」となったのではなかった [Chu 2002a; 2002b]。

チューの問題関心は、現代の「フィリピン人」と「華人」をナショナリズムの呪縛から解放することである。現代社会において、これら両者を分け隔てている固定観念が、実は本質主義的な語りであって、それが歴史的に創造／想像されてきた過程を検証することによって、相対化しようと試みている。別言すると、19世紀末葉から20世紀初頭のスペイン統治からアメリカ統治への移行期に「中国人」である、あるいは「中国人性」と認知された内容と現代において「中国人（華僑・華人）」であると認知される内容との間のずれを認識する必要性を指摘している。¹⁶⁾ そのために、この移行期に生きた人びとを取り囲んだ政治的、社会的、経済的な歴史的諸条件を抽出する一方、この時期の「中国人」および「中国系メスティーソ」の個々人のアイデンティティ形成・変容の具体的諸相を明らかにしなければならない。チューは、フィリピン革命において財政的に貢献したマリアノ・リムハップなどのマニラ・ビノンド地区の中国系メスティーソを事例に取り上げて、アイデンティティの重層性を論じた。また、これらのメス

↘ イックパークが記述の対象とした「中国系メスティーソ」とは必ずしも同じではなかった。その意味で、歴史的存在としての「中国系メスティーソ」と現代的な「出世仔」を区別する必要があるのと同様に、「中国系メスティーソ」それ自体についても、それぞれの歴史的文脈に位置づけて評価する必要があることを示している。

15) 1904年に小呂宋中華商務局として設置される。その後、華文名は変遷したが、1909年以降、英文名は Philippine Chinese General Chamber of Commerce (PCGCC) に固定された。

16) アンダーソンは、「国民的英雄」とされるリサールのスペイン語小説『ノリ・メ・タンヘレ』とレオン・マリア・ゲレロによる英語翻訳との間にあるずれは、現代の「フィリピン人」が示す意味内容と、19世紀末葉における「フィリピン諸島の住民」が示す意味内容とが一致していないためであり、それは「国民国家」の理念とは相容れない“pure mix”が「フィリピン人」を想像し、最初の「フィリピン人」となったことに由来すると指摘している [1994: 107–109]。実際、アギナルドによる、1898年6月12日付けの独立宣言には、独立すべき民として「全フィリピン諸島の住民 (los habitantes de todas estas Yslas Filipinas)」と表現されている [June 12, 1898 and Related Documents 1972: 27]。アメリカ統治時代の帰化法が「属人主義」に傾いていたことと考えあわせると、その隔たりは大きい。なお、リサールの「国民」意識をめぐる思索については、池端 [1994] を参照のこと。

ティーソのなかには、2,3代にわたって中国人移民に妻を提供している家系のあることから、メスティーソ女性の両義性を指摘している [Chu 2002a; 2002b]。さらに、チューは、現代の下層と上層のフィリピン人の中にある溝は、文化的志向の違いにも根差すもので、この志向の違いは、アメリカ統治の下で「メスティーソ」と「インディオ」が統合され「フィリピン人」となった後も解消されずに維持され、それが今日のフィリピン人の中での下層と上層の分断に繋がっているとの見通しを立てている [Chu 2002b: 356]。

このようなチューの議論の背景には、現代の「華僑・華人」を取り巻く本質主義的な言説に違和感を抱きながらも、それに翻弄されてきた自身のフィリピン「華人」としての体験があると思われる。チューは、幼い頃から「咱人」と「番仔」の区別を植え込まれ、「番仔語」を話すことを抑制され、華人の子弟が通うカトリック系の学校で初・中等教育を受けた。その一方、自身を「フィリピン人」と定義していたが、大学進学後、一般のフィリピン人と交流するなかで「フィリピン人」とは認知されず、「インチック」とみなされるという体験をした。さらに、廈門大学に留学中、周囲の（貧しく、みすばらしい）中国人にとって、自身が実は「番仔」であったことに衝撃を受けている。チューは、それまで漠然と「豊かさ」が「咱人」と「番仔」を分け隔てる一つの指標であり、一般のフィリピン人が「番仔」である理由の一端を、彼らの貧困と結びつけていたらしい。その後、チューは、歴史を繙くなかで、たとえば、現在のフィリピン「華僑・華人」社会では「華人」が「フィリピン人」と結婚することを厳しく抑制するが、かつてはそうでなかった事実と逢着するなどして、自身も含めて、現代フィリピンの「華僑・華人」が国民党あるいは共産党の影響下の「華僑・華人」論に取り込まれてきたことを自覚したのである [Chu 2001]。

「中国系メスティーソ」の生成——中国人移民とスペインの植民地統治

それでは、「中国系メスティーソ」は、いかにしてスペイン領フィリピンに固有の存在として生み出されたのであろうか。以下にその要点を示すことにしたい。¹⁷⁾

1. スペインの植民地統治と中国人移民

スペインのフィリピン諸島支配は、ローマ教皇の権威の世俗世界における代理として、スペイン国王が「パトロナート＝レアル（インディアスにおける国王の教会保護権）」を行使すること——「新発見の土地」にカトリック教会組織を維持する——を基底に据えるものであった。スペイン国王は、「インディアス」に福音を伝える使命をもって支配の正統性原理となし、そ

¹⁷⁾ 本章の記述は、特に注記をしないかぎり、菅谷 [2000] による。

の住民が齊しくカトリシズムを受容することを求めたのである。言い換えれば、「インディアス」の住民がカトリシズムに帰依することは、住民の意志はどうあれ、彼らがスペイン国王の権威を自発的に認め、その支配に服することに同意したとみなしたのである。このことは、フィリピン諸島住民はもとより、マニラとメキシコのアカプルコとの間にガレオン貿易が開始され、新大陸銀が流入することになった結果、マニラを初めとして諸島各地に居住するようになった中国人移民も例外ではなかった。

マニラは、それまで中国の南シナ海交易圏の辺縁に位置する港の一つに過ぎなかったが、当時のスペイン世界と中国世界の金銀交換比率の差を背景に急速な上昇をとげ、福建商人が主宰する帆船交易と強固に結びつくことになった。スペイン領マニラは、廈門を中心とする閩南各港からの中国帆船の主要な寄港地に変貌し、それに付随して経済機会を求める多数の中国人移民が殺到した。17世紀初頭には、マニラは、交易シーズンに、スペイン人人口を遥かに凌駕する、当時の南シナ海交易圏において最大規模の2万人の中国人が居住する港市であった。

スペイン植民地政府は、これらの中国人を植民地の貴重な財源とみなす一方、植民地の安全を脅かす「潜在的脅威」とも認識し、彼らに対しては、交易・商業の中心で中国人の指定居住区でもあった「パリアン」を隔離・収容施設として利用し、管理と徴税の実をあげる施策をとった。他方、中国人移民すなわち定住者には、スペインの植民地支配の正統性原理から、ドミニコ会が中心となって、中国大陆への布教活動の展開も視野に、カトリシズムへの改宗を通じた現地社会への同化がはかられ、1594年には、マニラのビノンド地区に中国人改宗者とその子孫のための居住地が設けられた〔De Viana 2001: 10-18〕。しかしながら、中国人移民に対する改宗事業は、全体としてみれば、必ずしも成功したとはいえなかった。現実には、彼らは必ずしもカトリック信仰を強制されず、おおむね植民地における「異教徒」の集団として存在することが許容され、スペインの植民地支配の正統性原理の埒外にあったのである。これは、スペイン植民地政府が、中国人の存在を植民地の「潜在的脅威」と捉えながらも、植民地の維持に不可欠な存在と認識していたからでもあった。

2. 中国人移民社会の「脱中国人」化／カトリック化

18世紀中葉のアランディア総督（在任、1754-59年）が実施した非カトリック教徒中国人の追放は、中国人移民社会に重大な転機をもたらした。マニラを中心とする中国人移民社会は、総体として「脱中国人」化、すなわち、カトリック化することによって、その存続を図ったのである。その結果、中国人移民社会は、教会に認知された現地女性との正式な婚姻を通して、中国系メスティーソを産み出す母胎に転化した。中国人移民社会は、その植民地支配の正統性原理であったカトリシズムを受容し、教会の支配を受け入れ、個々の中国人は、洗礼、婚姻、癒し（終油）の秘跡などを通して、スペイン国王の「臣民」として把捉され、植民地社会の正

統な構成員となった。

その一方、福建地方から毎年マニラにやってくる「異教徒」中国人のために、新たにパシグ川河口近くに交易・宿泊施設としてアルカイセリア・サン・フェルナンドが築かれた。彼らは、原則的に、アルカイセリアに収容され、交易終了後は帰国させられた。ここにおいて、カトリック教徒の中国人移民と、それ以外の季節滞在の中国人が明確に区別され、理論的には、スペイン領フィリピンの住民は全て「カトリック化」されたのである。

アランディア総督の示した中国人移民受け入れの枠組み——中国人移民を原則としてカトリック教徒に限るという受入れ方針は、バスコ総督（在任、1778–87年）の下で、中国人移民を個々に把握するしくみが整備され、制度的に一層の充実をみた。このようなスペインの統治方針は、基本的に1820年代に至るまで堅持され、その結果、移民として流入する中国人は、比較的少人数に押さえられた上、スペイン植民地の正統な構成要素として、便宜上あるいは名目的であったにせよ、おおむねカトリシズムに改宗して家族を形成し、植民地社会への統合が進んだ。この間、イギリスのマニラ占領（1762–64年）に関連して「対英協力中国人の追放」¹⁸⁾がなされ、その後、約10年にわたって新たな中国人移民の流入が途絶したことは、中国系メスティーソの商業的勃興の契機ともなった。

もちろん、現実には、カトリック教徒の中国人と「異教徒」中国人の間には緊密な連携があり、当該の個々人のカトリック信仰のあり方や現地社会への適応の状況は多様であった。彼らがカトリシズムを受容したことは、直ちに祖先崇拜を核とする、道教あるいは仏教的信仰体系の放棄を意味しなかったし、また、フィリピン植民地における婚姻と定住は、必ずしも故郷との断絶を意味しなかった。これらの中国人移民のアイデンティティのあり方は多様で、彼らの植民地社会への統合が一直線に進んだことを意味したのではなかった〔菅谷 2005〕

この間、1783年に、マニラ市の防衛力強化構想の一環として、16世紀後期以来、商業中心地かつ中国人居住区として存在していた「バリアン」が抛擲された。これを機に、多くの中国人がピノンドに移転したことが、現代のマニラのチャイナタウン形成の基礎となった。これ以降、スペイン領フィリピンを取り巻く国際情勢を背景に、ピノンドは、外国商館の立ち並ぶ金融・商業の中心地として発展し続け、戦前のフィリピンにおいて随一の都会となるまでに繁栄した。ピノンドには、1800年頃に「中国人組合（Gremio de Chinos）」が設立された。これは、中国人移民を統合し、自治を行う機関であり、スペイン当局との折衝に力を発揮した。その後、グレミオは、19世紀を通じて、スペインの中国人統治政策の変更——移民の宗教を問わない移民奨励策などにより、増大する中国人移民社会の利害を代表する強力な機関として成長した。グレミオは、19世紀末葉までには、清朝との関わりを深めながら、カトリック信仰を基底に

18) これについて詳細は、菅谷 [1995]、Escoto [1999; 2000] を参照のこと。

据えた植民地社会のなかであって、自らを「異教徒」として異化しつつ、清朝の官人服に身を包み、清朝に忠誠を誓う指導者が統治する「華僑社会」を可視化し、象徴するものとなった [菅谷 2001: 232-233]

3. 「異教徒の他者」からスペイン国王の「臣民」へ

スペイン領フィリピンには、16世紀後葉以来、少数派であったとはいえ、カトリシズムを自ら受容した中国人は一貫して存在しており、その子孫である中国系メスティーソの数的蓄積があり、ピノンドを初めてとして各地の地域社会への定着もあった。¹⁹⁾ しかし、ここで重要なのは、1750-1820年においては、スペイン領フィリピンに定住を希望する中国人は、個人の志向はどうあれ、植民地統治理念上、「華僑」として存在すること、すなわち、彼らが王賁武のいう「僑居者 (sojourners)」[Wang 1996] であり続けることが許されなくなったことである。それゆえ、非改宗者は、植民地の「僑居者」すなわち一時滞在者として、また、スペイン国王の権威に服さない「異教徒 (= 不忠実な) 中国人 (sangley infiel)」として、アルカイセリア・サン・フェルナンドに収容され、スペイン植民地社会の辺縁に追いやられたのである。これがスペイン領フィリピンにおける中国人移民の歴史を考える上で、他の東南アジア諸地域にはみられない、特筆される点である。

ところで、なぜアランディア総督は非カトリック教徒中国人を追放したのであろうか。一つには、清朝の「遷界令」(1661-83年)によって福建—マニラ間の帆船交易が不振に陥った結果、それまでマニラの「パリアン」を中心に活動していた中国人が活路を求めて地方に進出し、各地域経済を握るようになったことである。これは、「異教徒」の中国人の遍在を意味し、スペインの植民地統治理念からも早急に対応する必要があった。その一方、スペイン本国では、1700年にハプスブルグ王家が断絶し、ブルボン王家がとって替わった。ブルボン王家は、国家権力の強化を目指して行財政改革に着手し、中央集権化、税制改革、産業の振興に特徴づけられる「ブルボンの改革」を押し進めた。スペイン領フィリピンにおいては、マニラ・ガレオン貿易体制からの脱却を目指して、植民地における産業開発が模索されるとともに、中央集権的な統治体制の確立が求められた。その過程で、在住中国人の把握が急務になったと思われる [菅谷 2005]

すなわち、植民地経済の実権をスペイン人の手に取り戻すべく、中国人人口を減じ、かつ彼

19) たとえば、1987年に列聖されたフィリピン人最初のカトリック聖人ロレンソ・ルイスは、ピノンドで中国人の父と地元のタガログ人の母との間に生まれた中国系メスティーソで、1637年にキリシタン禁教下の長崎、西坂刑場で処刑された日本殉教者の一人である [Villaruel 1988]。また、現在の「聖母マリア修道会 (Congregation of the Religious of the Virgin Mary, RVM)」の前身を組織したイグナシア・デル・エスピリトゥ・サント (1663-1748年) もピノンド出身の中国系メスティーソであった [Foronda 1975]

らをスペイン国王の「臣民」として国家が管理する手段として、カトリシズムの受容が求められたと考えられる。その意味で、アランディア総督による中国人の追放は、カトリシズムを支配の正統性原理とし、それを国家に対する忠誠と結びつけていたスペインの植民地フィリピンにおいて、中国人移民のカトリシズム受容による一斉「帰化」をもたらすものであったといえよう。この時代、スペインは、すでに近代国民国家として確立すべくその内実を整える「ブルボンの改革」を押し進めたが、当時の清朝にも中国人移民にも「中華ナショナリズム」は存在しなかった。当時の移民は、スペイン領フィリピンに生きる手段として、スペイン人の認識とは別に、比較的自由にカトリシズムを受け入れたと考えられる。

「中国系メスティーソ」再々考——新しい視点を求めて

中国系メスティーソは、18世紀中葉以降のスペイン植民地政府による中国人移民受入れ方針の下、19世紀中葉まで、マニラの中国人卸売商人とも連携をはかりつつ、地方における商業・流通を担うなかで資本を蓄積して富裕化した。しかし、1830–40年代以降、スペインの統治政策の転換によって、カトリック信仰が移民の要件から除かれた結果、中国人移民の数が増加に転じ、地方商業を再び掌握するようになると、彼らは高利貸し資本に転じて土地集積を進めた。商品農業の発展を背景に、中国系メスティーソは一層の社会的上昇を果たし、19世紀末葉までには、上層のインディオやスペイン系メスティーソとも連携しつつ植民地社会のエリートを構成するようになった。²⁰⁾ 彼らは、中国人社会と密接な関わりをもちつつも、スペインの統治方針もあって、次第に独自のアイデンティティを保持する社会集団として成長した。中国系メスティーソは、全体としてみると、19世紀末葉までに現地化しつつ社会的上昇を遂げ、中国人移民社会とは距離をおいて別のアイデンティティを獲得し、植民地社会・経済の発展に重要な役割を果たし、そのなかから、フィリピン民族意識を担う人びとも輩出した。²¹⁾

しかし、特に第一世代メスティーソの個々人のアイデンティティのあり方は多様で、実質的な「中国人」も存在した。そのなかで中国人移民への妻の提供元として、マニラの中国系メス

20) この構図は、ウィックパークの示したモデルによるが、これは、19世紀中葉頃までに、主として地方にあって商業的に勃興した中国系メスティーソを想定した場合に最もあてはまると思われる。一方、チューが主として分析対象としたのは、19世紀末葉から20世紀初頭に、マニラのピノンド地区で、中国人移民と踵を接して生活した中国系メスティーソであった。この点で、今後の課題としては、研究対象とする中国系メスティーソを、その生きた時代とともに、生きた場所によって同定し、それぞれについて、まずは分析を精緻化し、その差異を明らかにする必要があると思われる。

21) 「中国系メスティーソ」の分類は、注5)で示したように、個々人がそれを選びとっていた側面があり、たとえば「財力とスペイン的教養」を表象するなど、次第に社会的意味をもつようになったことに注意しなければならない。その意味で、ピノンド地区などの「中国系メスティーソ」は「中国人」との経済・社会関係の上で、ウィックパークが示した対抗的な意味ばかりではなく、なんらかの利点を求めて、それを選択し続けていた可能性もあろう。また、デパースは、マニラなどの

ティーソ社会が存在した側面も見逃せない。実は、この時期のマニラの中国人移民の多くは、中国系メスティーソ女性を婚姻の相手に選んでいた。そこに、中国系メスティーソ女性および中国系メスティーソ社会の両義性——中国人カトリック教徒の現地化を促進する一方、中国人移民社会の存続を保証する——がある。ダニエル・デパースは、19世紀末葉のマニラでは、「中国系メスティーソ」の分類においてのみ、女性が男性を上回って存在していたと指摘している。これは何を意味するのであろうか。

一つには、当時の一般的趨勢にしたがって、中国系メスティーソ男性の多くが「インディオ」に鞍替えし、恒常的に「中国系」社会から離脱していったことが考えられる [Doeppers 1994: 84-87; 1998: 267-274]。また一つには、中国系メスティーソの男子が父の故郷で教育を受けるなどして不在となり、さらに、これらが「中国人」としてマニラに戻った可能性もある。いずれにせよ、中国系メスティーソの男性は、中国人移民社会の維持において、それそのものとしては必ずしも機能していなかったと思われる。一方、マニラ（なかでもビノンド）の中国系メスティーソ女性は、中国人女性の移民が皆無に等しい時代にあって、中国人移民社会の存続を支える存在として「中国系メスティーソ」であり続ける意味があった。以上のことは、スペイン領フィリピンでは、19世紀末葉に至るまで中国人移民社会（グレミオ）の指導者を務めるのがカトリック教徒に限られていたこと、すなわち、常にその指導者が「初代の」中国人移民であったこととも関係がある。今後は、このような視点から、個別の中国系メスティーソ社会およびその女性の果たした機能を見直す必要があると思われる。

新しい「華僑・華人」史の試み

アンドリュー・ウィルソンは、現在のフィリピンにおける「華僑・華人」社会の基本的なあり方がスペイン植民地末期からアメリカ統治時代に形成されたとし、1880年代から1916年を移行期として連続的に捉えている。そして、当時の「華僑・華人」社会の指導者が一貫して（担う個人の交替は否定しない）、自らの既得権益を最大限に擁護することが「華僑・華人」社会全体の利益に繋がるという立場で、権力（清朝、スペイン、アメリカ）との関係において、その忠誠の対象（アイデンティティ）を臨機応変に変化させながら、巧みに新しい環境に適応し、その社会の存続を図ったことを明らかにしている [Wilson 2004]。これは、「華僑・華人」史をナショナリズムから解き放つ試みであった。ウィルソンは、「華僑」を“ Overseas

↘ 1870年代から1890年代の人口データを比較して、「中国系メスティーソ」に分類される人口割合が一貫して減少傾向にある一方、「インディオ」のそれが増加傾向にあったことを示し、これは人びとが総体として自主的に「インディオ」を選択する傾向にあったためとしている。その一方、ビノンドでは1898年に至るまで「中国系メスティーソ」であることを選択した人びとが相当数に上った [Doeppers 1994; 1998: 267-274]。

Chinese”ではなく“Chinese Overseas”と表現して、彼らのアイデンティティの可変性、重層性、越境性を照射しようとした。ウィルソンは、これまで「華僑・華人」が中国本土あるいは居住地のナショナリズムのいずれかの文脈において語られてきたため、「華僑・華人」に対する負のステレオタイプの強化にも加担してきたとして、ウィックバークがその記述を1898年で区切ったこと、またアメリカ統治期の中国人のナショナリズムの勃興を論じたアントニオ・タン [Tan 1972] については本質主義的な「華僑・華人」論の影響を受けたものと批判した。

ウィルソンの政治史的な業績を補完するものとして、ウォン・コクチュウの『フィリピン経済における華人，1898-1941年』がある [Wong 1999]。ウォンは、アメリカの統治政策がフィリピン華人の経済発展に基本的枠組みを与えたことを指摘した上で、1898-1909年、1909-29年、1930-41年に時期区分し、それぞれの時期を特徴づける諸要素を同定し、「華僑・華人」の経済活動を動態的に把握している。たとえば、フィリピンでは、アメリカの統治政策によって、スペイン時代末期に徴税請負を基礎に財をなして移民社会をコントロールしていた古いタイプの指導者の多くは、本当の意味でのアメリカ統治が開始される時期——1907年のフィリピン議会の開設と1909年のペイン・オルドリッチ関税法の制定——を境に企業家としては没落していったことを示し、スペイン時代との非連続性の側面を示した。これらは、いずれもナショナリズムから距離をおいた視角からの新しい「華僑史」の試みといえる業績である。

おわりに

「華僑・華人」研究について、宮原暁は社会人類学の立場から「華僑・華人」という移動性を基盤に持った人々をいかに捉えるかを課題としているが、フィールドワークによって「華人のナショナリズム」の背後に置き去りにされた知識の断片を掬いあげることによって、「ともすればその特殊性のみが強調されがちであった華人研究は、『文化』『近代性』『暴力』といった普遍的な問題を議論する場になり得る」と述べている [宮原 2003: 213-214]。やはり人類学者であるダンハウザーは、パンガシナン地方ダグパンでのフィールドワークから、対象としての「華人」をエスニックグループとして捉えた時と「華人」を個人のレベルで捉えた時とでは見えてくるものが異なると指摘し、個々の「華人」の経験に焦点を当てた民族誌を試みている [Dannhaeuser 2004: 1-5]。また、最近の傾向として、エスニックグループとしての「華人」の自己認識の指標が、言語能力などの文化的指標より「血統」や「純血性」と連動する「華人性」を示す行動規範などの重視にみられるように、より「血」に根差すものにシフトしており、その意味で「華僑」か「華人」かの区別は全く意味をなさなくなっていると述べている [ibid.: 239]。

筆者は、ポスト・コロニアルあるいはカルチュラル・スタディをめぐる理論に疎く、これをよくしないが、19世紀中葉以降の「華僑」概念の創出は、「中国国家」が各地に分散した「血」に対して、彼らを中華の「地」に接合するべく発信したメッセージであったと思う。一方、「華僑・華人」にまわりつく偏狭なナショナリズムを克服する意図をもって登場した「ディアスポラ」論は、逆に、世界各地に分散し、ナショナルなあるいはエスニックな境界を越える現代の「華僑・華人」を「血」の繋がりから互いを接合させるものであろう。それは、必然的に、彼らに「血」の発祥である「中華」を認識させ、とりわけ現在の政治・経済的な情勢の下で、「中華」が具体的に展開される「地」として「中国国家」への回帰、あるいは結びつきを促進するような効果があるようにも思える。²²⁾

東南アジア歴史研究の立場からは、当面、個々の「中国人移民」あるいは「華僑・華人」の生きざまに注意を払いつつ、彼らが実際に居住する／した「地」に根差した視点から、その「地」の歴史を構成する要素の一つとして、彼らを、その「地」を取り巻く多様な要素からなる固有の歴史的文脈のなかに位置づける作業が必要であろう。フィリピン史に則していえば、個々の「中国人」や「中国系メスティーソ」のアイデンティティの変容性や越境性、重層性を越えて、彼らが、それぞれの時代や地域に応じて異なっていた環境のなかで、そのあり方や意味あるいは生きる戦略をどう選択してきたのかについて、具体的諸相を明らかにし、総体として、その存在の歴史的意味を検討することが課題になると思われる。その第一歩として、たとえば、ダンハウザーのような民族誌的な記述が、フィリピン史研究において、(華文による帳簿類その他の記録などの発掘を含めて)文献史料を使ってどこまで可能であるのか考えてみたい。それらの作業によって現れた中国人とその社会でのありようは、中国人を初めとする移民およびそのネットワークが、東南アジアあるいはそれを越えた繋がりも含めて、それぞれを規定する諸要素が交錯して存在する、それぞれの地域の歴史発展の枠組みの中で、どのような機能を果たしてきたのかを考える手がかりを提供するのではないだろうか。

22) なお、フィリピンに焦点を当てた最新の「華僑・華人」研究の意味に関する批判的論考に Hodder [2005] がある。これは、最近の傾向、すなわち、現代の「華僑・華人」の経済的成功の要因を、まず「華僑・華人」を同定し、それに固有とされる「文化」あるいは「構造」から各々の社会関係や組織・制度を説明すること、による陥穽を指摘し、それらを相対化する必要を述べている。さらに、現代フィリピンにとって、一衣帯水にある中国の影響力の増大の下で、「華僑・華人」研究へのスタンスが政治的意味をもっていることを示している。

文献解題

- 1 . Edgar Wickberg. 1965. *The Chinese in Philippine Life 1850–1898*. Yale University Press; reprint ed., Quezon City: Ateneo de Manila University Press, 2000.

本書は、「華僑・華人」研究はもちろんのこと、フィリピン植民地社会経済史研究にとっての古典である。本書は、「中国人」を扱っていながら狭い「華僑史」を脱して植民地社会の構造を分析し、現代フィリピンの社会構造に繋がる基本的枠組みの形成過程に「中国人移民」および中国系メスティーソを位置づけ、フィリピン史における彼らの存在の意味を明らかにしている。本書は長らく絶版であったが、2000年にアテネオ・デ・マニラ大学出版局より、著者による初版以降の研究状況を回顧した前言を付して、「厳選復刻」として出版された。このこと自体、本書の価値を雄弁に物語っているが、フィリピン革命100周年を経て、ある意味で、これまでの「ナショナリズム」を相対化する視点が受け入れられるようになったフィリピンにおける知的状況を示していると思われる。

- 2 . Richard T. Chu. 2002. Rethinking the Chinese Mestizos of the Philippines. In *Beyond China: Migrating Identities*, edited by Shen Yuanfang and Penny Edwards, pp. 44–74. Canberra: Study of the Chinese Southern Diaspora, The Australian National University.
- 3 . Richard T. Chu. 2002. The “Chinese” and the “Mestizos” of the Philippines: Toward a New Interpretation. *Philippine Studies* 50 (July–September): 327–370.

これらは、新しい世代のフィリピン華人である著者が、自身のアイデンティティのゆらぎを見つめてきた経験を基底にして、19世紀末葉から20世紀初頭の転換期に生きた中国系メスティーソのアイデンティティのあり方を、「マニラ公正証書」などによって具体的に解明し、さらに「フィリピン人」の形成の契機を展望したものである。具体的には、ウィックバーグによる「特別なフィリピン人」のイメージが先行する中国系メスティーソ、その背後にあって固定的に捉えられがちであったスペイン植民地政府の住民分類について、これらを構成した個々人が実は重層的、可変的なアイデンティティをもって、権力移行期の流動的な情勢に対応して、アイデンティティを選びとっていたことを明らかにし、その分類枠組みを相対化した。これらの中国系メスティーソを含めて、「フィリピン人」が形成され確立するのは、フィリピン議会の設置、清朝の国籍法の施行、中華民国の成立などによって、アイデンティティのあり方が固定化する過程を経た後で、早くとも1910年以降であると指摘した。これらの論考は、現代フィリピンの「フィリピン人」と「華人」を截然する本質主義的な言説を相対化することで、新たな認識の地平を拓く試みの一環を

なすものといえる。

- 4 . Andrew R. Wilson. 2004. *Ambition and Identity: Chinese Merchant Elites in Colonial Manila, 1880–1916*. Honolulu: University of Hawai'i Press.

本書は、「華僑・華人」が中国本土あるいは居住地のナショナリズムのいずれかの文脈で語られてきたとして、「華僑・華人」史をナショナリズムの呪縛から解き放つことを目的としている。本書では、スペインからアメリカへの権力移行期を、現代フィリピンの「華僑・華人」社会の祖型形成期として連続的に捉え、スペイン期とアメリカ期を断絶的に捉える歴史認識を相対化している。著者は、当時のフィリピンを東アジアのより広い歴史的な文脈におきつつ、その固有性を規定した諸要素を同定し、そのなかでマニラの「華僑・華人」エリートが中国、スペイン、アメリカという国家権力の間にあって、偏狭な「ナショナリズム」を超越して可変的、重層的なアイデンティティを使い分け、状況に巧みに対応し一貫して自らの利益を最大化する行動をとったこと、それが移民社会全体の利益の増大にも繋がっていた特有の構造を明らかにした。

- 5 . Wong Kwok-chu. 1999. *The Chinese in the Philippine Economy 1898–1941*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.

本書は、いわゆる「中華ナショナリズム」から距離をおいたフィリピン「華僑経済史」の本格的業績である。本書は、他の東南アジア諸国との比較を交えて、今日のフィリピン「華僑・華人」社会のあり方を規定したのがアメリカ植民地統治政策であったとし、その下での「華商」の活動を、当時の国際情勢なども考慮に入れ、5期に分けて動態的に捉え、フィリピン経済におけるアメリカ統治期の意味を明らかにしている。本書では、経済史の立場からのスペインからアメリカへの体制移行——1909年のペイン・オールドリッチ関税法と軌を一にしてスペイン期の「華僑」社会の指導者層が没落したこと、アメリカの排華政策および僑郷である福建省との近接性などによって、移民の「僑居」性が高く、農業や工業への投資よりも商業分野への投資が卓越したこと、これらが今日のフィリピン「華人・華人」社会、ひいてはフィリピン経済のあり方と繋がっていることを指摘している。

参考論文・文献リスト

- Alejandro, Clark L. 2003. *A History of the 1902 Chinese Exclusion Act: American Colonial Transmission and Deterioration of Filipino-Chinese Relations*. Manila: Kaisa Para Sa Kaunlaran.
- Amyot, Jacques. 1973. *The Manila Chinese: Familism in the Philippine Environment*. IPC Monographs, no.2. Quezon City: Institute of Philippine Culture, Ateneo de Manila University.
- Anderson, Benedict. 1988. Casique Democracy in the Philippines: Origins and Dreams. *New Left Review* 169 (May-June): 3–33; reprint ed., In *Discrepant Histories: Translocal Essays on Filipino Cultures*,

- edited by Vicente L. Rafael, pp. 3–47. Philadelphia: Temple University Press, 1995.
- . 1994. Hard to Imagine: A Puzzle in the History of Philippine Nationalism. In *Cultures and Texts: Representations of Philippine Society*, edited by Raul Pertierra and Eduardo F. Ugarte, pp. 81–109. Quezon City: University of the Philippines Press.
- Ang See, Teresita. [1990]1997—. *Chinese in the Philippines: Problems and Perspectives*. Manila: Kaisa Para Sa Kaunlaran.
- Ang See, Teresita; and Go Bon Juan. 1996. *The Ethnic Chinese in the Philippine Revolution*. Manila: Kaisa Para Sa Kaunlaran. (Filipino ed., *Ang mga Ethnikong Tsino sa Rebolusyong Pilipino*. Manila: Kaisa Para Sa Kaunlaran, 1996; Chinese ed., 洪玉華; 吳文煥『華人與菲律賓革命』菲律賓華裔青年聯合會, 1996)
- . 2004. International Collaboration, Research, Publications and Advocacy on Ethnic Chinese Issues: The Kaisa Experience in the Philippines. In *Chinese in the Philippines: Problems and Perspectives*, vol. 3, edited by Teresita Ang See, pp. 83–108. Manila: Kaisa Para Sa Kaunlaran.
- Bankoff, Greg. 1996. *Crime, Society, and the State in the Nineteenth Century Philippines*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- Bankoff, Greg; and Weekley, Kathleen. 2002. *Post-colonial National Identity in the Philippines: Celebrating the Centennial of Independence*. Hampshire: Ashgate.
- Boxer, C. R. 1950. A Late Sixteenth Century Manila Ms. *Journal of the Royal Asiatic Society* (April): 37–49.
- Carino, Theresa Chong. 1998. *Chinese Big Business in the Philippines: Political Leadership and Change*. Singapore: Times Academic Press.
- Ch'en Ching-ho. 1968. *The Chinese Community in the Sixteenth Century Philippines*. Tokyo: Centre for East Asian Cultural Studies.
- Chu, Richard T. 2001. Guilt Trip to China. In *Cultural Curiosity: Thirteen Stories about the Search for Chinese Roots*, edited by Josephine M. T. Khu, pp. 128–144. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- . 2002a. Rethinking the Chinese Mestizos of the Philippines. In *Beyond China: Migrating Identities*, edited by Shen Yuanfang and Penny Edwards, pp. 44–74. Canberra: Study of the Chinese Southern Diaspora, The Australian National University.
- . 2002b. The “Chinese” and the “Mestizos” of the Philippines: Toward a New Interpretation. *Philippine Studies* 50(July–September): 327–370.
- . 2003. “Catholic,” “Mestizo,” “Sangleys”: Negotiating “Chinese” Identities in Manila 1870–1905. Ph.D. dissertation, University of Southern California.
- Dannhaeuser, Nobert. 2004. *Chinese Traders in a Philippine Town*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- De Viana, Lorelei D. C. 2001. *Three Centuries of Binondo Architecture 1594–1898: A Socio-Historical Perspective*. Manila: University of Santo Tomas Publishing House.
- Doeppers, Daniel F. 1986. Destination, Selection and Turnover among Chinese Migrants to Philippine Cities in the Nineteenth Century. *Journal of Historical Geography* 12 (4): 381–401.
- . 1994. Tracing the Decline of the Mestizo Categories in Philippine Life in the Late 19th Century. *Philippine Quarterly of Culture & Society* 22(June): 80–89.
- Doeppers, Daniel F.; and Xenos, Peter, eds. 1998. *Population and History: The Demographic Origins of the Modern Philippines*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- . 1998. Evidence from the Grave: The Changing Society Composition of the Populations of Metropolitan Manila and Molo, Iloilo, during the Later Nineteenth Century. In *Population and History: The Demographic Origins of the Modern Philippines*, edited by Daniel F. Doeppers and Peter Xenos, pp. 265–277. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- Escoto, Salvador P. 1999. The Last Mass Expulsion of the Chinese and the New Spanish Policy for Their Readmission to the Philippines, 1764–1779. *Philippine Studies* 47(January–March): 48–76.
- . 2000. A Supplement to the Chinese Expulsion from the Philippines, 1764–1779. *Philippine Studies* 48(April–June): 209–234.
- Felix, Alfonso Jr. 1966. How We Stand. In *The Chinese in the Philippines*. Vol. 1: 1570–1770, edited by

- Alfonso Felix, Jr., pp. 1–14. Manila: Solidaridad.
- , ed. 1966–69. *The Chinese in the Philippines*. 2 vols. Manila: Solidaridad.
- Foronda, Marcelino A. Jr. 1975. *Mother Ignacia and Her Beaterio*. Makati: St. Paul Publications.
- Guerrero, Milagros C. 1966. The Chinese in the Philippines, 1570–1770. In *The Chinese in the Philippines*. Vol. 1: 1570–1770, edited by Alfonso Felix, Jr., pp. 15–39. Manila: Solidaridad.
- Hau, Caroline S. 2000. *Necessary Fictions: Philippine Literature and the Nation, 1946–1980*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- . 2004. *On the Subject of the Nation: Filipino Writings from the Margins 1981–2004*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- Hodder, Rupert. 2005. The Study of the Overseas Chinese in Southeast Asia: Some Comments on Its Political Meanings with Particular Reference to the Philippines. *Philippine Studies* 53(3): 3–31.
- June 12, 1898 and Related Documents. 1972. Manila: National Historical Commission; reprint ed., *June 12, 1898 and Related Documents: A Commemorative Publication on the Centennial of the Proclamation of Philippine Independence*. Manila: National Historical Institute, 1998.
- Khu, Josephine M. T., ed. 2001. *Cultural Curiosity: Thirteen Stories about the Search for Chinese Roots*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- Larkin, John A. 1982. Philippine History Reconsidered: A Socioeconomic Perspective. *The American Historical Review* 87 (June): 595–628.
- McCarthy, Charles J., ed. 1974. *Philippine-Chinese Profile: Essays and Studies*. Pagkakaisa Monograph, no. 3. Manila: Pagkakaisa Sa Pag-unlad.
- McCoy, Alfred W.; and Jesus, Ed. C. de, eds. 1982. *Philippine Social History: Global Trade and Local Transformations*. Asian Studies Association of Australia, Southeast Asia Publications Series, no. 7. Ateneo de Manila University Press.
- Merino, Jesus. 1966. The Chinese Mestizo: General Considerations. In *The Chinese in the Philippines*. Vol. 2: 1770–1898, edited by Alfonso Felix, Jr., pp. 15–39. Manila: Solidaridad.
- Noceda, Juan de; and Sanlucar, Pedro de. 1860. *Vocabulario de la lengua tagala*. Manila: Imprenta de Ramirez y Gilaudier.
- Omohundro, John T. 1981. *Chinese Merchants Families in Iloilo: Commerce and Kin in a Central Philippine City*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press; Athens, Ohio: Ohio University Press.
- Reid, Anthony. 1997. Introduction. In *The Last Stand of Asian Autonomies: Responses to Modernity in the Diverse States of Southeast Asia and Korea, 1750–1900*, edited by Anthony Reid, pp. 1–25. London: Macmillan Press; New York: St. Martin's Press.
- . ed. 1996. *Sojourners and Settlers: Histories of Southeast Asia and the Chinese*. Asian Studies Association of Australia, Southeast Asia Publications Series, no. 28. St Leonards, NWS: Allen & Unwin.
- . ed. 1997. *The Last Stand of Asian Autonomies: Responses to Modernity in the Diverse States of Southeast Asia and Korea, 1750–1900*. London: Macmillan Press; New York: St. Martin's Press.
- See, Chinben; and Ang See, Teresita. 1990. *Chinese in the Philippines: A Bibliography*. Manila: De La Salle University Press.
- Skinner, G. William. 1996. Creolized Chinese Societies in Southeast Asia. In *Sojourners and Settlers: Histories of Southeast Asia and the Chinese*, edited by Anthony Reid, pp. 51–93. St Leonards, NWS: Allen & Unwin.
- Tan, Antonio S. 1972. *The Chinese in the Philippines, 1898–1935: A Study of Their National Awakening*. Quezon City: R. P. Garcia Publishing.
- . 1984. The Chinese Mestizos and the Formation of the Filipino Nationality. Occasional Papers, series II, no. 2. Quezon City: Asian Center, University of the Philippines.(Mimeographed.); reprint ed., Manila: Kaisa Para sa Kaunlaran, 1988 and 1994.
- Villaruel, Fidel. 1988. *Lorenzo de Manila: The Protomartyr of the Philippines and His Companions*. 3d ed. Manila: UST Press.
- Wickberg, Edgar. 1964. The Chinese Mestizo in Philippine History. *Journal of Southeast Asian History* 5

- (March): 62–100.
- . *Chinese in Philippine Life, 1850–1898*. New Haven: Yale University Press, 1965; reprint ed., Manila: Ateneo de Manila University Press. 2000.
- . 1997. Anti-Sinicism and Chinese Identity Options in the Philippines. In *Essential Outsiders: Chinese and Jews in the Modern Transformation of Southeast Asia and Central Europe*, edited by Daniel Chirot and Anthony Reid, pp. 153–183. Seattle: University of Washington Press.
- Wang Gungwu. 1996. Sojourning: The Chinese Experience in Southeast Asia. In *Sojourners and Settlers: History of Southeast Asian Chinese*, edited by Anthony Reid, pp. 1–14. St Leonards, NSW: Allen & Unwin.
- Wilson, Andrew R. 2004. *Ambition and Identity: Chinese Merchant Elites in Colonial Manila, 1880–1916*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Wong Kwok-chu. 1999. *The Chinese in the Philippine Economy 1898–1941*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.

日本語・中国語

- アン・シー、テレシタ、ゴ・ボン・ジュアン [ホアン]. 2003. 「華僑・華人研究とその重要性」『中国21』17: 37–66.
- 陳荊和. 1963. 『十六世紀之菲律賓華僑』新亞研究所東南亞研究室.
- 陳台民. 1985. 『中菲關係与菲律賓華僑』朝陽出版社.
- 池端雪浦. 1992. 「フィリピンにおける現地人官僚制度の変容——スペイン体制後期を中心に——」『東南アジア世界の歴史的位相』石井米雄；辛島昇；和田久徳（編），179–199ページ所収．東京大学出版会．
- . 1994a. 「フィリピン国民国家の原風景——ホセ・リサールの祖国観と国民観」『アジア・アフリカ言語文化研究』46・47合併号: 43–78.
- . 1994b. 「フィリピン国民国家の創出」『変わる東南アジア史像』池端雪浦（編），306–327ページ所収．山川出版社．
- 可児弘明. 1995. 「カマン・イントレストとしての華僑・華人」『華僑華人——ポードレスの世界へ』可児弘明；游仲勲（編），1–24ページ所収．東方書店．
- 李永錫. 1959. 「西班牙殖民者对菲律賓華僑压迫的政策与罪行」『中山大学学报』1959年4期．（『東南亞歴史論叢』第二集，265–304ページに再録．中山大学東南亞歴史研究所，1979）．
- 宮原 曉. 1997. 「『チノイ』をめぐる想像と挑戦——中国系フィリピン人とフィリピン国民国家の関係をめぐって」『社会人類学年報』23: 125–139.
- . 1998a. 「通婚とエスニック・バウンダリー——フィリピン・セブ市の華人社会の事例から」『アジア経済』39（10）: 26–52.
- . 1998b. 「『未婚』を生きる女性——フィリピン・セブ華人社会の事例から」『社会と象徴——人類学的アプローチ』大胡欽一；加治明；佐々木宏幹；比嘉政夫；宮本勝（編），村武精一教授古稀記念論文集，207–220ページ所収．岩田書院．
- . 2001. 「交錯する呼称とモノのやりとり——フィリピン華僑・華人研究再考に向けて」『アジア移民のエスニシティと宗教』吉原和男；クネヒト・ペトロ（編），265–296ページ所収．風響社．
- . 2002. 「周縁の素描——チャイニーズの人口移動と知識のダイナミズム」『拡大する中国世界と文化創造——アジア太平洋の底流』吉原和男；鈴木政崇（編），468–496ページ所収．弘文堂．
- . 2003. 「『華人のナショナリズム』を越えて」『游仲勲先生古希記念一言集』游仲勲先生古希記念論文集編集委員会（編），213–214ページ所収．游仲勲先生古希記念論文集編集委員会．
- . 2005. 「寡婦の力——ドニャ・モDESTA・シンソン・ガイサノとフィリピン・セブのチャイニーズ」『華僑華人研究』2: 108–121.
- 白石 隆. 1987. 「アヘン王，砂糖王，チュコン——インドネシアにおける華僑財閥の系譜」『社会科学と東南アジア』東南アジア研究会（編），221–245ページ所収．勁草書房．
- 菅谷成子. 1995. 「一八世紀中葉フィリピンにおける中国人移民社会の変容と中国系メスティーソの興隆——対英協力中国人の追放をめぐる——」『東洋学報』76（3–4）: 61–91.
- . 2000. 「18世紀中葉フィリピンにおける中国人移民社会のカトリック化と中国系メスティーソの興隆——『結婚調査文書』を手がかりにして——」『東洋文化研究所紀要』139: 420–444.

- . 2001. 「島嶼部『華僑社会』の成立」『東南アジア近世国家群の展開』桜井由躬雄（編）（岩波講座東南アジア史4）所収．岩波書店．
- . 2005. 「18世紀末葉のスペイン領マニラ——『マニラ公正証書原簿』からみた植民地社会における中国人」『愛媛大学法文学部論集』人文学科編18: 15-32．
- 高橋五郎．2003. 「劉享賻と葉飛 二人の『華僑將軍』——華僑の事例的研究の一方法として」『中国21』17: 67-112．
- 内田晶子．1974. 「一六三九年のマニラにおける中国人暴動」『お茶の水史学』18: 1-18．
- 吳景宏．1968. 「西班牙時代第一階段中菲關係之探討」『大陸雜誌』36(8・9 期合刊): 245-272 (1-28) ．
- 箭内健次．1938. 「マニラの所謂パリアンに就いて」台北帝国大学文政学部『史学科研究年報』5: 189-346．
- . 1943a. 「比島支那人の地方發展に就いて」『南方民族』7(1・2): 1-27．
- . 1943b. 「マニラトンド区の支那人の發展——西班牙人の對支那人居住政策」『南亞細亞學報』2: 35-64．